

脱植民地化と冷戦（下）

島村直幸

六 ヴェトナム戦争とアメリカ

（一）ヴェトナム戦争の起源と開始

これまでの内容を繰り返す箇所もあるが、以下、ヴェトナム戦争とアメリカについて取り上げる。

アメリカのアイゼンハワー政権は、一九五四年七月二二日の第一次インドシナ戦争を終結させるジュネーブ協定に調印せず、一九五五年一〇月二六日に南ヴェトナムにジエム政権を擁立し、一九五六年の統一選挙も実施しなかった。こうして、アメリカは、ヴェトナムの共産化を防ぐため、フランス撤退後のヴェトナムに残っていく（Logevall, 2010: 290-292; Chapman, 2014: 108-111; Young, 1991; Ellsberg, 2002; Simpson, 2013）。その後、一九六一年から一九七三年まで、アメリカと北ヴェトナムとの間で、ヴェトナム戦争（第二次インドシナ戦争）が戦われた（一九六一年から一九六五年までが内戦、一九六五年から一九七三年までが国際戦争の段階に分けられる）。

(1)

一九五九年に北ヴェトナムは南ヴェトナムの武力解放を決意し、一九六〇年一月二〇日、南ヴェトナム民族解放戦線(ベトコン)を結成した。これに対し、一九六一年九月の時点で、ジエム政権がアメリカ軍地上部隊の派遣をケネディ政権に要請した。一九六一年一月一日、ケネディ政権は国家安全保障会議(NSC)で、ヴェトナムに軍事顧問団を派遣することを決定した。テラー使節団が作成した地上軍部隊の派遣案も検討されたが、当時のケネディ大統領は、大規模な米地上軍の投入には慎重な姿勢をとった。一九六二年二月の時点で、ケネディ政権は、アメリカ軍事顧問団を改組し、南ヴェトナム援助軍司令部を新設した(Logevall, 2010: 293-295; Chapman, 2014: 111-113; 高松、一九九八: 一七二-一七五)。

一九六三年になると、南ヴェトナム情勢は悪化した。たとえば、五月には古都ユエで仏教徒への発砲事件が起こった。一九六三年八月から九月にかけて、ケネディ政権は国家安全保障会議で、ヴェトナム政策の見直しを検討し、反ジエム派とジエム支持派が激論を交わした。一九六三年九月に、ケネディ政権は、サイゴン調査団による現地報告を受け、国家安全保障覚書二六三号で南ヴェトナムのジエム政権に「圧力と説得」の政策をとることを決定した。マクナマラ国防長官とテラー大統領軍事顧問の勧告による。「圧力と説得」の政策とは、ジエム政権に経済援助の一時停止など圧力を加えながら、同時に政治改革を行うように説得していく両面政策である。この時点でも、ケネディ大統領は、大規模な米地上軍の投入にはなお慎重であった。また、一九六五年末までに、一〇〇〇名のアメリカ軍を撤退させる計画案も検討されていた(Logevall, 2010: 293-295; Latham, 2010: 275-277; Chapman, 2014: 111-113; 高松、一九九八: 一七四-一七五; Simpson, 2013)。

一九六三年一月一日には、すでに見た通り、南ヴェトナムでクーデターが起こり、ジエム政権が倒れる。ケネディ政権はクーデターの動きを黙認した。この段階で、ケネディ政権はジエム政権を見限っていた。ところが、ほぼ同じタイミングで、一月二三日、ケネディ大統領がダラスで暗殺される。一九六三年末の時点で、ヴェトナム

駐留のアメリカ軍は、一万六五〇〇万人に達していた。もしケネディが暗殺されていなければ、政権二期目にヴェトナムから撤退していたか、については論争がある (Logevall, 2010: 293-295; Latham, 2010: 275-277; Chapman, 2014: 111-113; 高松、一九九八：一七五—一七六；Simpson, 2013)。

(2) ヴェトナム戦争の拡大

ジョンソン副大統領が大統領に昇格し、「レッツ・コンティニュー」を標語に掲げた。

一九六四年一月八日に、ジョンソン大統領は、一般教書で「偉大なる社会」の実現を目指すことを表明する。一九六四年七月二日には公民権法 (Civil Rights Act) が成立した。さらに、一九六五年八月六日には投票権法 (Voting Rights Act) が成立する。三〇年間の議会生活で培われたジョンソンの議会操縦術のおかげであった。これに対して、若いケネディ大統領は、アメリカ議会のベテラン議員たちとの関係が必ずしも良好ではなかった (島村、二〇一八、一二三頁)。アメリカ国内での黒人の差別は、すでに見た通り、冷戦を戦う上で、自由民主主義と資本主義、法の支配などリベラルな価値を軸とした「自由世界」を指導する超大国アメリカにとって、大きな矛盾となっていた。この矛盾をソ連や中国は効果的に批判していた。公民権法と投票権法の成立は、こうした矛盾を払拭する効果があった (Fraser, 2013: 470, 480-481; Irvin, 2014: 94, 100-101; Plummer, 2013; Anderson, 2013)。

(3) ジョンソン大統領は、副大統領時代から、ケネディ大統領よりもヴェトナム情勢により楽観的な見通しを持っていた。圧倒的に優勢な軍事力と近代兵器を駆使しながら、アメリカが北ヴェトナムとベトナムに対して軍事的圧力を加えていけば、彼らはいずれ降伏せざるを得なくなるはずである、という考え方である。一九六四年三月、ジョンソン大統領は、国家安全保障行動覚書二八八号で、北ヴェトナム爆撃計画の準備を命令した (Logevall, 2010: 295-298; Latham, 2010: 275-277; Chapman, 2014: 111-113; 高松、一九九八：一七六；Simpson, 2013)。

一九六四年八月二日から四日にかけて、米艦艇に対する北ヴェトナム軍の攻撃、トンキン湾事件が起こる。その直後の八月八日、アメリカ議会で、トンキン湾決議が圧倒的多数で採択された。インドシナ地域で敵国の武力攻撃を撃退し、侵略を阻止するために、必要な一切の措置をとることができる権限を大統領に付与する内容であった(佐々木、二〇一・二〇一―二〇一―二二二・高松、一九九八・一七七)。

同じ八月には、ジョンソン大統領が演説で、「わが国が今日、東南アジアで直面している課題は、これまでにギリシヤとトルコ、ドイツと北朝鮮、レバノンと中国で、勇敢かつ強力に立ち向かってきた課題と同じものだ」と強調している。同じ時期、ラスク国務長官しばしば、「南ヴェトナムの首都サイゴンの防衛は『自由世界』の安全にとって、西ベルリンの防衛と同じくらい重要である」と述べていた。マクマンによれば、ヴェトナム戦争には「国内政治上の要請も影響を与えていた」のであり、「ケネディもジョンソンも、南ヴェトナムを共産主義の手に明け渡せば、大きな政治的混乱が生じてアメリカは麻痺してしまい、大統領としての政治生命も終わってしまう、と危惧していた」という(McMahon, 2003: 101-103)。

一九六四年一月の大統領選挙で、民主党のジョンソン大統領が再選される。共和党の対立候補である保守派のゴールドウォーター上院議員に圧勝した。他方で、民主党は公民権法と投票権法のため南部の票を失った。それまで南部は、民主党にとって強固な支持基盤であった。これ以降、大統領選挙で共和党が南部を勝利していく。また、レーガンなど共和党の保守系議員の躍進が目される(島村、二〇一八・一七六)。

一九六五年二月七日、ジョンソン大統領は、北ヴェトナムへの爆撃(北爆)を命令した。ジョンソン政権は、一七度線北方のドンホイを爆撃し、北爆に踏み切った。これ以降、北爆が恒常化していく。三月八日には、三五〇〇名の米海兵隊が南ヴェトナム北部のダナンに上陸した。こうして、一九六五年から六八年にかけて、ジョンソン政権のヴェトナムへの介入は本格化した。にもかかわらず、アメリカはヴェトナムで決定的な勝利を収めることがで

きずにいた。一九六八年一月の時点でも、ジョンソン大統領はテレビ演説で、「戦況は有利に進んでいる」とアメリカ国民に説明していた (Logevall, 2010: 295-298; Latham, 2010: 275-277; Chapman, 2014: 111-113; 高松、一九九八：一七七—一七八；Simpson, 2013)。

この間の一九六五年はじめには、バンディ国家安全保障問題担当大統領補佐官がジョンソン大統領に、「アメリカの国際的な威信と、その影響力のかなりの部分が、ヴェトナムにおいて直接的な脅威にさらされております」と警告していた。ジョンソン大統領は、一九六五年四月の重要な演説で、「この戦争、そして、アジア全体に新たな現実が生まれています。共産中国の影がより色濃くなっています。ヴェトナムでの戦いは、「中国による」より広い攻勢の一部に過ぎません」と述べている。同じ四月には、マクナマラ国防長官が、アメリカがヴェトナムで戦わなければ、東南アジア全体が中国の支配下に入り、「アジアは赤く染まる」ことになる上に、もしアメリカがヴェトナムから撤退したら、世界の勢力バランスは大きく変化する、と警告している。こうして、「ジョンソンとその主な補佐官たちは、他のすべての世代の冷戦の闘士たちと同じように、どんな犠牲を払ってでもアメリカの信頼性を守らなければならぬ」と確信していた。アメリカの信頼性は、共産主義の攻勢に対する大きな抑止力であり、同時に、アメリカの冷戦同盟システム全体を維持する上で不可欠な紐帯でもあったからである」という (McMahon, 2003: 101)。

しかし、一九六八年一月三十一日、「テト攻勢」が起こる。アメリカ軍はこの戦闘に一応勝利したが、ヴェトナム戦争での苦境がアメリカ国民にはじめて明らかとなった。アメリカ国民の間で、反戦気運が一気に高まる。特に知識人や学生たちの間でヴェトナム反戦運動が起こり、学生たちは即時撤退を要求していく。一九六八年はアメリカ大統領選挙の年であったが、三月三十一日にジョンソン大統領は、大統領選挙への不出馬を表明した。同時に、一方的な北爆の部分的停止と、北ヴェトナムへの和平交渉を呼びかけた。一九六八年末の段階で、ヴェトナムに派遣されたアメリカ軍は、五三万六〇〇〇人に達していた。にもかかわらず、ヴェトナム戦争での勝利はなかなか実現せず、

戦争は「泥沼化」の様相を呈していく (Logevall, 2010: 295-298; Latham, 2010: 275-277; Chapman, 2014: 111-113; 高松, 一九九八: 一七七一-一七九; Simpson, 2013)。対立するソ連と中国はそれぞれ、北ヴェトナムへの軍事支援を強化した (Latham, 2010: 274; Mitter, 2013: 131-132)。

(3) ヴェトナム戦争の泥沼化とアメリカの撤退

こうして、ヴェトナム戦争の泥沼化にともない、「いかにヴェトナムから撤退するか」がアメリカ外交にとって緊急の課題となった。一九六八年一月の大統領選挙で、共和党のニクソン大統領候補は、ヴェトナム戦争については明らかにしていなかった (Logevall, 2010: 298-302; Latham, 2010: 275-277; Chapman, 2014: 113-114; 宇佐美, 一九九八: 一八二)。

キッシンジャー国家安全保障問題担当大統領補佐官は、一九六九年の時点で、「一九四五年後の二〇年間、われわれの国際的な活動は、経営技術と科学技術が国際システムを再形成し、『新興国』で国内変革をもたらす能力をわれわれに与えるという前提に基づいてきた」が、グローバル・サウスの脱植民地化を念頭に、「政治的な多極は、アメリカのデザインを押しつけることを不可能としてきた」と指摘している。その後、ニクソン大統領も、「われわれは新しい時代に生きているため、古い制度の多くが時代遅れとなり、不十分なものとなっている」と指摘している (Irvin, 2014: 102)。

一九六九年七月二五日の「グアム・ドクトリン」ないし「ニクソン・ドクトリン」以降、ニクソン政権はアジアからの撤退を模索しつつ、南ヴェトナム軍を訓練し、戦闘をヴェトナム人に肩代わりさせていく「ヴェトナム化」を図りながら、ヴェトナムからの撤退も段階的に進めていった。しかし、北ヴェトナムとの和平交渉を進める一方

で、軍事的な圧力はむしろ強化していった。実際、北ヴェトナムから南ヴェトナムへの補給ルートを断絶させるため、隣国のカンボジアとラオスに侵攻し、大規模な北爆も実施している (Logevall, 2010: 298-302; Latham, 2010: 275-277; Chapman, 2014: 113-114; 宇佐美、一九九八：一八二—一八三)。

ニクソン政権は、ヴェトナムからの「名譽ある撤退」を実現するため、北ヴェトナムを背後で支援する中国とソ連との関係改善を図った。一九七二年二月二日から二八日にかけての米中和解を足上がりに、同年五月二二日には米ソ間で緊張緩和 (détente) を実現し、北ヴェトナムを国際的に孤立させる戦略的な外交を展開した。アメリカに有利な米中ソの三角関係が構築されたのである (Irvin, 2014: 102; Schulzinger, 2010)。こうして、一九七三年一月二七日に「ヴェトナム和平協定」が調印され、アメリカは同年三月末までにヴェトナムから撤退した (Logevall, 2010: 298-302; Chapman, 2014: 113-114; 宇佐美、一九九八：一八三—一八八；石井、二〇一五；Simpson, 2013)。ヴェトナム戦争は、アメリカが経験した中で最も長い戦争となり、はじめての「敗北」となった。ヴェトナム戦争の経験は、その後のアメリカ外交に大きな影響を残すこととなった。ヴェトナム戦争でのアメリカ軍死者は、五万八〇〇〇名を越え、戦費は一兆五〇〇〇億ドル以上もかかり、使用爆撃量は第二次世界大戦の二倍にも達した。にもかかわらず、アメリカは敗北した (Logevall, 2010: 302-304; Chapman, 2014: 114-115)。

(7) アメリカは、ニクソン政権の下で、中ソ両国への接近を図り、なるべく「名譽ある撤退」を実現したが、一九七五年四月三〇日以降、ヴェトナム、カンボジア、ラオスのインドシナ三カ国が共産化してしまう。この時、フォード政権は南ヴェトナムを支援しようとしたが、アメリカ議会がこの動きに反対した。アメリカ議会はそれまでに、対外政策の分野で「復権 (resurgence)」の動きを見せ、トンキン湾決議を取り消し、一九七三年一月七日には戦争権限決議 (WPR) を採択して、大統領の戦争に歯止めをかけようとしていた (島村、二〇一八：二一八)。しかし、優れてリアリズムの感覚を持つニクソンとキッシンジャーは、ヴェトナムからのアメリカ軍の撤退からヴェトナム

ナム統一までに「然るべき間隔 (decent interval)」を作り出せばいい、と判断していたと思われる。

こうして、ヴェトナム戦争後のアメリカ外交にとっては、ヴェトナム戦争のような長い戦争、戦争の泥沼化を回避することが至上命題となった。「ヴェトナム・シンドローム (症候群)」である。「第二のヴェトナム」を回避するために、「ワインバーガー・ドクトリン」や「パウエル・ドクトリン」が打ち出されていく。アメリカは、大量のハイクの軍事力を一気に投入することや、事前にアメリカ議会や世論の支持を獲得すること、あらかじめ「出口戦略 (exit strategy)」を描いておくことを前提として、戦争には慎重に踏み切っていくこととなっていく (Logevall, 2010: 302-304; Chapman, 2014: 114-115; 松岡、二〇〇三：第六章：二〇〇一)。

七 グローバル・サウスと国内冷戦

第三世界全体における数十もの新しい独立国の誕生を推し進めたのは、時には流血の事態や紛争によって彩られた脱植民地化のプロセスであった。この新興国の誕生と脱植民地化という二つの事象は、たまたま冷戦と定期的に重なり合っただけではなく、冷戦の影響を大きく受けながら形成されたものであった。…冷戦という圧力は、植民地主義から独立へと移行する動きに悪影響を与えることもあれば、それを促進することもあった。冷戦が具体的にどのような影響を与えるかは、植民地紛争のケースごとに大きく異なっていたが、超大国間の冷戦は常に重要な外部変数として作用することになった (McMahon, 2003: 106)。

マクマンは、こうした指摘に続いて、第三世界における国内冷戦の諸相を論じるにあたり、以下の通り、指摘する。「冷戦がその過程に与えた多面的な影響についてきちんと検証しなければ、いかなる脱植民地化の歴史も不十分

なものにならざるを得ない。このことは、脱植民地化の幕開けとなった、一九四〇年代後半の南アジアや東南アジアの解放運動から、脱植民地化時代の終わりを告げた、一九七〇年代初頭から半ばのポルトガル植民地統治に対するアフリカ人の抵抗運動までの、すべてに当てはまるのである」(McMahon, 2003: 106)。

アジア、アフリカ、中東の大部分、そしてカリブ海地域の一部において見られた植民地主義後の新国家の形成もまた、冷戦を背景とするものであった。こうした新国家の形態、結束や活力、各国の国内政治における権力配置、国際的な注目を集めたり、威信を獲得したりする能力、経済開発における優先課題を満たすために必要な資源や資本、技術支援を外部から確保したり、あるいは国防上の必要性を満たすための軍事支援を勝ち取ったりするための指導者の能力。こうしたすべての要素に冷戦は大きな影響を及ぼしていた。脱植民地化の歴史と同じように、冷戦という外部変数について慎重かつ体系的に注目せずして、第三世界における第二次世界大戦後の国家形成の歴史を記述することはできないのである (McMahon, 2003: 106-107)。

「冷戦は、野心に燃える第三世界の指導者たちを、課題や挑戦、そしてチャンスが絡まり合った複雑な状況のなかに置くことになった」とも指摘される。マクマンは、ヴェトナムとインドネシアの事例を取り上げた上で、「極端な言い方をすれば、第三世界の指導者たちは、反共主義者としての信念や、(急進的ではなく) 穏健な政治的態度、ないしは親西側的な姿勢を示したり宣言することで、アメリカの支持を獲得することができたし、その反対に、革命的な姿勢や反西側色を強めることでソ連または中国の支持を勝ち獲ることもできたのである」と指摘する (McMahon, 2003: 107-108)。

「いくつかの国は、公式に西側に関与することが国内政治上の重要な要請を満たす上で最適の選択だと考えて、

積極的にアメリカとの提携を模索した」。たとえば、パキスタンやタイである。「西側との提携を選択した第三世界の国々について言えば、概して、次のようなパターンが存在していた。こうした国々が西側との提携を選んだのは、共産主義に対する恐怖からではなく、国内政治上の理由によるものであった。そして、その結果、その後各国の内情勢の展開は、西側との提携関係から大きな影響を受けることになった。このようなパターンをかなり顕著な形で示した事例だけを見ても、イラク、イラン、サウジアラビア、トルコ、パキスタン、フィリピン、セイロン、韓国、タイといった非常に多くの国で、公式また非公式な同盟関係を西側と結ぶという指導者の決定が、国内の優先課題や利用可能な資源、国内の政治勢力のバランスなどに重大な影響を与えたことがわかる」という (McMahon, 2003: 109-110)。

マクマンは、第三世界と非同盟運動について、以下の通り、指摘する。

一部の第三世界の指導者たちの目には、慎重に練られた非同盟戦略は非常に魅力的なものに映った。彼らは、東西どちらかへの公式関与を控えることによつてこそ、重要な国家目標をより効果的に前進させることができると考えていたのである。なかでも、とりわけ、インドネシアのスカルノ、エジプトのガマル・アブドウル・ナセル、ガーナのクワメ・エンクルマ、インドのジャワハルラール・ネルーは意識的に、東西両陣営から独立した立場を保とうとした (McMahon, 2003: 110)。

ネルーは、「外交関係がわれわれの手から離れて、他者によつて管理されるようになれば、その分だけ独立性を失うのだ」と警告していたとこう (McMahon, 2003: 110)。
さらに、以下の通り、結論づけられる。

「これまで見てきたことからすれば、第三世界の国々や政治指導者が、能動的な主体性を発揮したという事実を認めなければならぬ。第三世界の指導者たちは、利益を最大化するため、あるいは損害を最小限に抑えるために、彼らの時代の国際社会を支配していた冷戦という現実を利用し、また、コントロールしようと努めた。しかし同時に、冷戦が第三世界の国民と社会にもたらした事態の多くが、現地の政府や人々にとっては予期せぬものであったことや、彼らにコントロールできるものではなかったことも認識しておく必要がある。この関連で、早くも一九五〇年代には、第三世界は冷戦の主戦場として浮上していた、ということも改めて強調しておく必要がある。朝鮮、コンゴ、ヴェトナム、アンゴラ、アフガニスタン、ニカラグアといった地域では、現地にその発生原因がある紛争が急速に大きなコストをとまなうものへと拡大していったが、それは、冷戦がそこに重なり合う形で展開したためであった。一九四五年から一九九〇年にかけて世界で燃え上がった戦争の死者のうち、推定二〇〇〇万人は第三世界の紛争の犠牲者であった。そして、そうした紛争の大部分が、少なくとも間接的には、冷戦とつながっていたということをお忘れてはならないのである」(McMahon, 2003: 111)。

八 デタントとグローバル・サウス

一九七〇年代は、米ソ間でハイ・デタントが成立し、意外と早く崩壊していった時代である。他方で、ヨーロッパ・デタントは、一九八〇年代まで継続していく。「モスクワ会談から生まれた大きな期待にデタントが応じることにはなかった。超大国の行動に関する『基本原則宣言』という荘厳な誓約は、中東、東南アジア、アフリカなどで繰り返される米ソ間の利害対立を防ぐことができなかった。また、第三世界で続いた米ソ対立は、アメリカ国内におけるデタントへの支持を侵食していった」とマクマンは指摘する。(McMahon, 2003: 113)。

一九七〇年代の米ソ間のデタントを意外と早く崩壊させた原因の一つが、デタントに対するアメリカ国民の支持が脆弱であったことである。もう一つの原因は、米ソ両国が異なるデタント観を有していたことである。ソ連が第三世界（グローバル・サウス）で革命を後押しするイデオロギー闘争を積極的に展開した結果、アメリカ側に幻滅が広がり、反デタントの保守派の勢力を勢いづけてしまった。

「保守的な批判勢力―その多くは、共産主義に対するイデオロギー的な反感や、ソ連国家に対する根本的な不信感を一度として弱めたことはなかった―は、ソ連の国策が拡張主義的なものであることに変わりはなく、デタントはそれに正統性を付与するものでしかない」と非難した。デタントは宥和政策と同じだという、挑発的な見方をする者すら現れた。…ますます増大するデタント批判派に屈服する形で、一九七六年にフォード大統領は、自身の政権にデタントという言葉を用いることをやめさせたのである」とマクマンは指摘する (McMahon, 2003: 133)。

「一九七〇年代半ばに議論を巻き起こし、また複雑な様相を呈した国際紛争の一つであったアンゴラ情勢も、デタントのさらなる悪影響をもたらした。ポルトガルの植民地であったアンゴラは一九七五年一月に独立を果たしたが、その直後、対立する三つの勢力間での内戦が勃発した。アメリカ（および中国）が秘密裏に支援していた穏健な新西側勢力と戦闘を繰り広げていたのが、左派のアンゴラ解放人民運動 (MPLA) であった。このMPLSをキューバ軍が支援したことで、事態は西アフリカにおける代理戦争の様相を呈することになった」とも指摘される (McMahon, 2003: 135-136)。

「地政学を信奉するキッシンジャーは、アンゴラ紛争は東西関係の文脈で見なければならぬ、と主張した。すなわち、アンゴラ紛争は米ソの意志と覚悟の試金石であり、その結果はグローバルな意味を持ちうるというのである。ニクソンの辞任、ヴェトナムでの敗北、帝王的大統領に対する議会の攻撃といった、諸々の影響が積み重なった結果、ソ連は、アメリカの国力は大幅に落ちているという、アメリカには望まぬ結論に達するかもしれない

い。アンゴラ情勢は、こうしたソ連の対米認識を左右する試金石だとキッシンジャーは考えたのである」とマクマンは指摘する (McMahon, 2003: 136)。

「フォード政権は、アンゴラの親米勢力に対する秘密支援を強化しよう議会に要請したが、これは失敗に終わった。ヴェトナムから抜け出してまもなく、再び第三世界に介入するという政府の考えを、議員たちは嫌悪していた」とも指摘される。キッシンジャーは、「アンゴラのような事態がさらに発生すれば」、「(デタントの) 継続は困難でしょう」とキッシンジャーは警告していたという。「米ソの雪解けを批判する保守派にとって、アンゴラ情勢は、デタントは依然として拡張主義的なソ連を一方的に利するものだ」という彼らの見方に、さらなる裏づけを与えるものであった」とマクマンは指摘する (McMahon, 2003: 136)。

一九七〇年代半ばから後半にかけて、保守派によるデタント批判派さらに激しさを増した。反デタント勢力は、たとえば、民主党のジャクソン上院議員や「現在の危機に関する委員会 (Committee on the Present Danger)」のニッツェラである。彼らは、ソ連の意図について根強い不信感を持ち、ソ連の通常戦力および核戦力の向上に対しても強い警戒心を抱いていた。反デタントがまずその批判の根拠となったのは、第三世界でのソ連の冒険主義的な行動パターンが続いていたことであった。もう一つ、批判の根拠としたのは、軍備管理交渉が深刻な欠陥を抱えていたということであった (McMahon, 2003: 136)。

「興味深いことに、年齢を重ねつつあったソ連政府の指導者たちは、アメリカ政府の目に自らの行動がどれほど挑発的なものと映っているかが理解できず、またその行動がアメリカ国内の反デタント派に有利に作用し、その結果、デタントの崩壊を早めていることも認識できないようであった。一九七〇年代のアフリカ、アジア、中東におけるソ連の積極的な行動は、たしかに、それまでと比べてはるかに大規模なものとなっており、それはアメリカが無視することのできない事実であった」とマクマンは指摘する (McMahon, 2003: 13)。

「アンゴラ介入が成功したことで、一九七六年二月にMPLA政府が樹立されたことに気を良くしたソ連は、その翌年、エチオピアに誕生したばかりの左派政権への武器供与を開始した。一九七八年初頭には、戦略的に重要なオガデン半島をめぐる戦闘において、ソ連から支援と輸送での援助を受けていたキューバ軍が、アメリカの支援するソマリア軍に圧勝した」という (McMahon, 2003: 139)。

マクマンは、ウエスタッドの言葉を以下の通り、引用する。すなわち、ソ連は「社会主義とソ連モデルに対して忠誠を誓った新しい革命政府への支援」を自らの「国際的な責務」と考えていただけでなく、「内部矛盾の顕在化を速め、資本主義世界の最終的崩壊を促す好機」である、と捉えていた。しかし、こうした野心および行動と、それと並行してソ連が抱いていた、建設的で相互に有益な関係をアメリカと築きたいという望みを、調和させることは不可解であった (McMahon, 2003: 139)。

長年アメリカと同盟関係にあったニカラグアの独裁者アナスタシオ・ソモサ・デバイレは、マルクス・レーニン主義者が主導し、キューバとも緊密な関係を持っていた解放運動サンディニスタによって打倒された。反西側的な革命勢力の台頭を恐れていた人々の不安をさらに煽った。このような事態は、イランで発生していた (McMahon, 2003: 140)。デタントに最終的に終止符を打ったのは、一九七九年一月二四日からソ連軍のアフガニスタン侵攻であった。ドブレイン駐米ソ連大使はその回顧録のなかで、「全体的に見た場合、ある程度までデタントは、第三世界における米ソ対立の戦場に葬られたと言えるだろう」と述べている (McMahon, 2003: 141-142)。

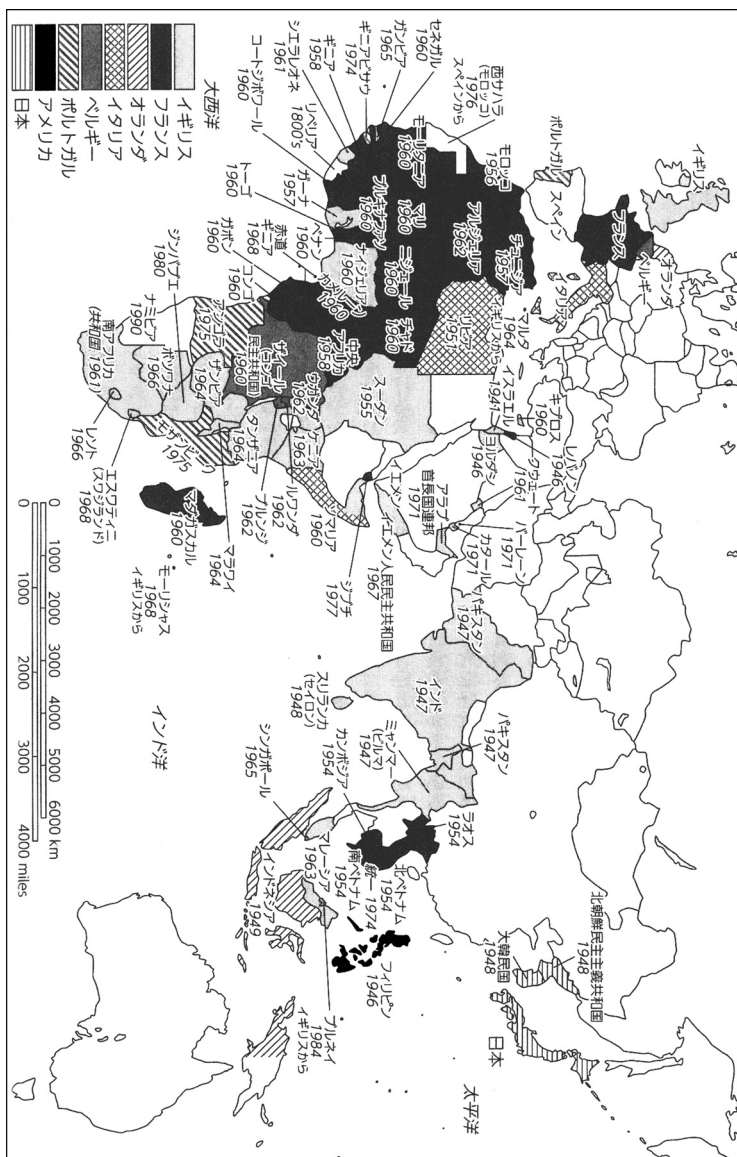
九 脱植民地化と冷戦の終結

狭義の「脱植民地化」の波は、一九四六年七月四日のフィリピンを皮切りとして、一九四七年八月一五日のイン

ド・パキスタン分離独立と一九四八年五月一日のイスラエル建国、八月一日の大韓民国（韓国）と九月九日の朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の建国を経て、一九五〇年代後半から脱植民地化の機運はさらに高まった。特に一九六〇年は一七カ国が独立する「アフリカの年」となった。本稿の冒頭で見た通りである。

ここで注目すべき点は、一九六〇年二月三日に南アフリカのケープタウンを訪問したイギリスのマクミラン首相が、アフリカの民族意識に強烈な印象を受けつつ、「この（アフリカ）大陸に吹いている変化の風」を承認せざるを得ない、と声明したことである。「われわれがそれを好むかどうかにかかわらず、このナショナリズムの高まりは政治的な事実である。われわれはそのことを事実としてすべて受け容れなければならぬし、国家の政策においても考慮に入れていかなければならない」とまで指摘した。またマクミランは、「私の理解では、この二〇世紀後半の大きな問題は、立場をまだ決めていないアジアやアフリカの人々が東側に与するのか、それとも西側に与するのかという問題である。彼らは共産主義の陣営に与するのであるのか？ あるいは、アジアやアフリカで現在、自決の偉大な経験が成功裏に進行しているが、均衡は自由と秩序に有利な方向へと傾いていくのであるのか？」とも指摘している（Irvin, 2014: 98; Hemming, 1996; Fraser, 2013: 475; Hyam, 2006: ch. 4; Owendale, 1995; Yaqub, 2013; 佐々木、一九九八、三八四頁…前川、二〇二二）。

植民地の維持が経済的にも政治的にも困難であることを自覚したイギリスは、植民地独立の促進を比較的早い段階で基本方針とした。たとえば、ケニアや中央アフリカ、南ローデシアなどイギリス人入植者が少数者ながら支配層を形成していた地域や、キプロスやマルタなど戦略的な重要地域と目された地域では複雑で困難な経緯を辿ったが、一九五七年三月のガーナ、同年八月のマラヤに続いて、一九六〇年から一九六四年までにアフリカ、西インド、太平洋の一三の植民地が相次いで独立した。冷戦が深まるにつれて、アメリカがイギリスの帝国を容認するようになっていたにもかかわらず、Perkins, 1986: 48-49; Reynolds, 1986: 30; 2000: ch. 3; Smith, 2012:



1945年以降のアフリカとアジアの脱植民地化

注：記載年は独立した年。

出典：Bradley (2010：478) に筆者加筆。

Irvin, 2014; Orde, 1996: ch. 6; Bradley, 2010; Hannieder and Auton, 1980: chs. 7, 11; Fraser, 2013; Duara, 2013; 永野, 二〇〇一; 佐々木, 一九九八; 三八四—三八五; 半澤, 二〇〇一; 二〇〇五; 二〇〇七; 細谷, 二〇〇六; 篠崎, 二〇一一)。

一九六〇年代のヴェトナム戦争の時代には、修正主義 (revisionist) や「ニューレフト」のアメリカ外交史家たちが、アメリカの資本主義システムの膨張、アメリカ外交の帝国主義的拡張を問題視したことがある。彼らは、東アジア地域に限定せずに、「門戸開放 (open door)」という概念をネガティブな意味で使った (これに対して、正統字派のアメリカ外交史家たちは、ソ連帝国の膨張を問題視した)。ポスト修正主義のギャデイスも、冷戦後の一九九七年の『歴史としての冷戦』で、冷戦を米ソ二つの「帝国」の相克として描いた (Gaddis, 1998)。冷戦が終結し、ソ連邦が崩壊した結果、ソ連邦が「公式の帝国」で「陸の帝国」であったことが改めて再認識され、他方で、アメリカについても、「非公式の帝国」ないし「植民地なき帝国」という側面に注目が集まったからであろう (Barkley and Hagen eds., 1997)。しかし、帝国主義世界体制とヴェトナム戦争の時期を除いて、アメリカを「帝国」を呼ぶことは稀であった。

一九六八年一月に労働党のウィルソン政権下のイギリスが、スエズ以東からの撤退を表明したことは、ヴェトナム戦争を戦うアメリカにとっては、最悪のタイミングであった (Hyam, 2016: ch. 5; Louis, 2006: ch. 21; 木畑, 二〇〇六)。しかも、イギリスは、アメリカからの強い要請にもかかわらず、ヴェトナム戦争に軍を派遣することを拒否し続けた。それどころか、和平を模索した。アメリカのジョンソン政権は、こうしたイギリスの政策を快く思わなかった (水本, 二〇〇九; 二〇〇五—二〇〇六; 秋田, 二〇一一; 二四四—二四八)。

一九七〇年代前半には、国連などを舞台として、第三世界、グローバル・サウスの国々が一致団結し、「新国際経済秩序 (NIEO)」の構築を訴え、南北問題の根本的な解決を強く要求するようになる。当時は、デタントの時期

で、東西関係はより改善した方向へ向かったが、南北問題はより深刻化していると認識されていた。

一九七一年には、アメリカがイギリスからインド洋上のディエゴ・ガルシアを貸しつけた。その見返りに、イギリスは、アメリカから潜水艦発射のポラリス・ミサイルを低コストで獲得した (Fraser, 2013: 477)。

その後も、植民地支配に固執していたポルトガルの植民地が、一九七〇年代半ばに独立した (Lloyd-Jones and Pinto, eds., 2003; Schmidt, 2013: 274-277; Fraser, 2013: 476)。すでに見た通り、アフリカのアンゴラは、東西対立の代理戦争の様相を呈した。

こうして、一九七〇年代半ばまでに、ヨーロッパの大国の「海の帝国」は解体していった。歴史家のウェスタッドによれば、一九七〇年代半ばにはほぼ完了した脱植民地化の流れは、アメリカのイデオロギーという観点からは二つの異なる方向を示すものであった。一九五〇年代の時点で、こうしたアンビヴァレンスは強く認識されていたという。

一方では、アメリカのエリートは、ヨーロッパ植民地帝国の解体をアメリカの政治的、経済的自由の理念を拡張する機会を与えるものとして歓迎した。それはまた、二つの大戦を経てその地位を大きく衰退させたヨーロッパのエリートが、国内社会の改良と共産主義に対する防衛に専念できることをも意味した。…脱植民地化によって、第三世界の将来の進路はヨーロッパではなくアメリカの責任となりつつあった。しかし、他方では、脱植民地化によって第三世界で集団主義的イデオロギーが優位に立つという脅威も増大していた。中国共産主義革命、アメリカ支援の下に戦われたヴェトナム、マラヤ、フィリピンでの対共産ゲリラ戦争、独立後のインドネシア、インド、エジプト各政権の急進性、さらにはグアテマラやイランにおける介入の成功でさえ、アイゼンハワー政権に、第三世界は民主主義を受け容れる準備ができていなくなると確信させた (Westad, 2007: 26-27)。

その後、アメリカやイギリスが南アフリカ地域で少数派の白人による統治を支持していたにもかかわらず、一九〇八年四月一八日には、ローデシアがジンバブエとして独立した (Schmidt, 2013: 272-282; Saunders and Onslow, 2010: 234-238; Tamarin, 1990; Fraser, 2013: 478)。一九八九年八月からの「東欧革命」は、ソ連の勢力圏であった東ヨーロッパ諸国の共産主義政権が市民の手で倒され、ソ連の「非公式の帝国」が事実上、崩壊したことを意味した (軍事同盟のワルシャワ条約機構は、一九九一年七月一日に解体した)。冷戦の終結の始まりである (一九九〇年一月三日のドイツ再統一で冷戦は終結する)。一九九〇年三月二二日には、ナミビアが独立している (Saunders and Onslow, 2010: 238-243; Shultz, 1993; Schmidt, 2013: 278-280; Fraser, 2013: 478)。一九九一年十二月二五日にはロシア帝国の版図をほぼ継承していた「陸の帝国」としてのソ連邦が崩壊し、「公式の帝国の時代」はほぼ終焉したのである (Barkey and Hagen, eds., 1997; Kupchan, 1996; 木畑, 二〇一三: 四三三; ホワイト, 二〇〇六)。また、冷戦の終結前後に、南アフリカのアパルトヘイトが廃止されていくこととなる (Saunders and Onslow, 2010: 238-243; Plummer, 2013: 515-518)。

ここで改めて注目すべきことは、第二次世界大戦後までヨーロッパや日本の宗主国に支配されていた植民地にとっては、冷戦の論理よりも、脱植民地化の論理の方がより重要であったということである。ただし、アメリカやイギリス、フランスにとっては、脱植民地化のダイナミズムを時に見誤り、冷戦の論理でのみ政策対応し、失敗することもあった (佐々木, 二〇一三: 一一六-一一九)。

たとえば、その典型的な事例が、一九五六年一月二九日に勃発したスエズ戦争である。英仏両国の植民地主義とエジプトのナシヨナリズム、冷戦のそれぞれの論理が鋭く交錯した (佐々木, 一九九七)。もう一つの典型的な事例は、一九六一年一月二五日から一九七三年一月二七日までのヴェトナム戦争であろう。「特別な関係」にあったはずの米英両国は、深刻な同盟の相剋に陥った (水本, 二〇〇九)。中東地域や東南アジア地域に限らず、東アジア

地域や南アジア地域、アフリカ大陸の脱植民地化も、冷戦の論理だけから眺めると、全体像を見失うことになりかねない（木畑、一九九六；宮城、二〇〇一；菅、二〇〇九；渡辺編、二〇〇六；Costigliola and Hogan eds., 2014）。こうして、冷戦の時代の脱植民地化によって、帝国主義世界体制は次第に溶解・崩壊していった。植民地は、ヨーロッパの主権国家ないし国民国家として独立し、国際社会に参加した。また同時に、国民国家を相対化させる動きとして、相互依存が深化した。冷戦後には、グローバリゼーションが急速に進展してきた（いる）。歴史に規定される「公式の帝国」の時代は、ソ連邦の崩壊でほぼ終焉したのである。残された「公式の帝国」は、中国のみである。こうして、公式の帝国の時代のほぼ終わりは、注目すべきことに、冷戦の終結とグローバリゼーションの本格化とほぼ重なり合っていた。

引用・参考文献：

- U.S. Department of State (1972), *Foreign Relations of the United States 1947*, Vol. VI, *The Far East*, U.S. Government Printing Office, esp. pp. 67-68.
- Ansprenger, Franz (1989), *The Dissolution of the Colonial Empire*, Routledge.
- Borstelmann, Thomas (2001), *The Cold War and the Color Line: American Race Relations in the Global Arena*, Harvard University Press.
- Brendon, Piers (2008), *The Decline and Fall of the British Empire 1781-1997*, Vitage.
- Bull, Hedley & Adam Watson, eds. (1984), *The Expansion of International Society*, Oxford University Press.
- Chafetz, Tony (2002), *The End of Empire in French West Africa: France's Successful Decolonization*, Berg.
- Cooper, Frederick (2005), *Colonialism in Question: Theory, Knowledge, History*, University of California Press.
- Dudziak, Mary (2000), *Cold War Civil Rights*, Princeton University Press.
- Ellsberg, Dania (2002), *Secrets: A Memoir of Vietnam and the Pentagon Papers*, Viking Penguin.
- Fray, Marc, Ronald W. Pruessen, and Tan Tai Yong, eds. (2003), *The Transformation of Southeast Asia: International Perspectives on Decolonization*, M.E. Sharpe.
- Gaddis, John Lewis (1998), *We Now Know: Rethinking Cold War History*, Oxford University Press.
- Garthoff, Raymond (1985), *Détente and Confrontation: American-Soviet Relations from Nixon to Reagan*, Brookings Institution.
- Garthoff, Raymond (1994), *The Great Transition: American-Soviet Relations and the End of the Cold War*, The Brookings Institution.
- Gordon, Paul Lauren (1996), *Power and Prejudice: The Politics of and Diplomacy of Racial Discrimination*, Westview Press.
- Hahn, Peter L. (1991), *The United States, Great Britain, and Egypt, 1945-1956*, The University North Carolina Press.
- Hannieder, Wolfram F., and Graeme P. Anton (1980), *The Foreign Policies of West Germany, France, & Britain*, Prentice-Hall.
- Hotta, Eri (2007), *Pan-Asianism and Japan's War, 1931-1945*, Palgrave Macmillan.
- Howe, Stephen (2002), *Empire: A Very Short Introduction*, Oxford University Press.

(21)

- Hyam, Ronald (2006), *Britain's Declining Empire: The Road to Decolonisation 1918-1968*, Cambridge University Press.
- Irvine, Akira (1981), *Power and Culture: The Japanese-American War, 1941-1945*, Harvard University Press.
- James, Lawrence (1994), *The Rise and Fall of the British Empire*, St. Martin's Press.
- Kapur, Sudarshan (1992), *Raising Up a Prophet: The African-American Encounter with Gandhi*, Beacon Press.
- Kennedy, Dame (2016), *Decolonization: A Very Short Introduction*, Oxford University Press.
- Kunz, Diane B. (1991), *The Economic Diplomacy of the Suez Crisis*, The University of North Carolina Press.
- Layton, Azza Salama (2000), *International Politics and Civil Right in the United States, 1941-1960*, Cambridge University Press.
- LeSueur, D. ed. (2003), *The Decolonization Reader*, Routledge.
- Little, Douglas (2002), *American Orientalism: The United States and the Middle East since 1945*, The University of North Carolina Press.
- Lloyd, Stewart and Antonio Costa Pinto, eds. (2003), *The Last Empire: Thirty Years of Portuguese Decolonization*, Intellect.
- Louis, Wm. Roger (1978), *Imperialism at Bay: The United States and the Decolonisation of the British Empire 1941-1945*, Oxford University Press.
- Louis, Wm. Roger (2006), *Ends of British Imperialism: The Scramble for Empire, Suez and Decolonization, Second Edition*, I.B. Tauris.
- McMahon, Robert J. (1981), *Colonialism and Cold War: The Struggle for Indonesian Independence, 1945-1949*, Cornell University Press.
- McMahon, Robert J. (2008), *Dean Acheson and the Creation of an American World Order*, Potomac Books.
- McMahon, Robert J. (2003), *The Cold War: A Very Short Introduction*, Oxford University Press.
- McMahon, Robert J., ed. (2013), *The Cold War in the Third World*, Oxford University Press.
- Myrdal, Gunnar (1962), *An American Dilemma*, Harper & Row.
- Reynolds, David (2000), *One World Divisible: A Global History since 1945*, Penguin Books.
- Orde, Anne (1996), *The Eclipse of Great Britain: The United States and British Imperial Decline, 1895-1956*, St. Martin's Press.

- Plummer, Brenda Gayle, ed. (2003), *Window on Freedom: Race, Civil Rights, and Foreign Affairs, 1945-1988*, The University of North Carolina Press.
- Rotter, Andrew J. (1987), *The Path to Vietnam: Origins of the American Commitment to South Asia*, Cornell University Press.
- Shraeder, Peter J. (1994), *United States Foreign Policy toward Africa: Incrementalism, Crisis and Change*, Cambridge University Press.
- Shultz, George (1993), *Turnoil and Triumph*, Charles Scribner's Sons.
- Tamarkin, M. (1990), *The Making of Zimbabwe: Decolonization in Regional and International Politics*, Frank Cass.
- Smith, Simon C. (2012), *Ending Empire in the Middle East: Britain, the United States and Post-War Decolonization, 1945-1973*, Routledge.
- Thorne, Christopher (1985), *The Issue of War: States, Societies, and the Far Eastern Conflict of 1941-1945*, Oxford University Press.
- Westad, Odd Arne (2007), *The Global Cold War*, Cambridge University Press.
- Whitney, Thomas P., ed. (1963), *Khrushchev Speaks!*, University of Michigan Press.
- Young, Marilyn (1991), *The Vietnam Wars, 1945-1990*, Harper Collins.
- Anderson, Carol (2013), "The Histories of African Americans' Anticolonialism during Cold War," Robert J. McMahoned, *The Cold War in the Third World*, Oxford University Press, pp. 178-191.
- Bradley, David S. (2010), "Decolonization, the Global South, and the Cold War, 1919-1962," Melvyn P. Lefler and Odd Arne Westad eds., *The Cambridge History of the Cold War*, Volume I Origins, Cambridge University Press, pp. 464-485.
- Byrne, Jeffrey James (2014), "The Cold War in Africa," Artemy M. Kalinovsky and Craig Daigle eds., *The Routledge Handbook of the Cold War*, Routledge, pp. 149-162.
- Byrne, Jeffrey James (2013), "Africa's Cold War," Robert J. McMahoned, *The Cold War in the Third World*, Oxford University Press, 101-123.

- (24) Chapman, Jessica M. (2014), "Vietnam and the Global Cold War," Artemy M. Kalinovsky and Craig Daigle, eds., *The Routledge Handbook of the Cold War*, Routledge, pp. 105-117.
- Chamberlin, Paul Thomas (2014), "The Cold War in the Middle East," Artemy M. Kalinovsky and Craig Daigle eds., *The Routledge Handbook of the Cold War*, Routledge, pp. 163-177.
- Citino, Nathan J. (2014), "Modernization and Development," Artemy M. Kalinovsky and Craig Daigle eds., *The Routledge Handbook of the Cold War*, Routledge, pp. 118-130.
- Costigliola, Frank and Michael J. Hogan eds. (2014 [1996]), *America in the World: The Historiography of American Foreign Relations since 1941*, Second Edition, Cambridge University Press.
- Duara, Prasenjit (2013), "The Cold War and the Imperialism of Nation-States," Richard H. Immerman and Peter Goedde, eds., *The Oxford Handbook of the Cold War*, Oxford University Press, pp. 86-104.
- Engerman, David C. (2013), "South Asia and the Cold War," Robert J. McMahoned, *The Cold War in the Third World*, Oxford University Press, pp. 67-84.
- Fraser, Cary (March 1992), "Understanding American Policy towards the Decolonization of European Empires, 1945-1964," *Diplomacy & Statecraft*, pp. 105-125.
- Fraser, Cary (2000), "'The New Frontier' of Empire in the Caribbean: Transfer of Power in British Guiana, 1961-1964," *The International History Review*, Vol. 22, pp. 583-610.
- Fraser, Cary (2013), "Decolonization and the Cold War," Richard H. Immerman and Peter Goedde, eds., *The Oxford Handbook of the Cold War*, Oxford University Press, pp. 469-485.
- Gallagher, John and Ronald Robinson (1953), "The Imperialism of Free Trade," *Economic History Review*, Vol. 6, No. 1, pp. 1-15.
- Greijeses, Piero (2010), "Cuba and the Cold War, 1959-1980," Melvyn P. Leffler and Odd Arne Westad eds., *The Cambridge History of the Cold War*, Volume II Crises and Détente, Cambridge University Press, pp. 327-348.
- Guan, Ang Cheng (2013), "The Cold War in Southeast Asia," Richard H. Immerman and Peter Goedde, eds., *The Oxford Handbook of the Cold War*, Oxford University Press, pp. 230-245.

- Herring, George C. and Richard H. Immerman (1984), "Eisenhower, Dulles, and Dienbienphu," *Journal of American History*, Vol. 71, pp. 343-363.
- Irvin, Ryan M. (2014), "Decolonization and the Cold War," Artemy M. Kalinovsky and Craig Daigle eds., *The Routledge Handbook of the Cold War*, Routledge, pp. 91-104.
- Jackson, Ian (2010), "Economics and the Cold War," Melvyn P. Lefler and Odd Arne Westad eds., *The Cambridge History of the Cold War*, Volume II Crises and Détente, Cambridge University Press, pp. 50-66.
- Jian, Chen (2013), "China, the Third World, and the Cold War," Robert J. McMahoned, *The Cold War in the Third World*, Oxford University Press, pp. 85-100.
- Jun, Niu (2010), "The Birth of the People's Republic of China and the Road to the Korean War," Melvyn P. Lefler and Odd Arne Westad eds., *The Cambridge History of the Cold War*, Volume I Origins, Cambridge University Press, pp. 221-243.
- Kalinovsky, Artemy M. (2014), "The Cold War in South and Central Asia," Artemy M. Kalinovsky and Craig Daigle eds., *The Routledge Handbook of the Cold War*, Routledge, pp. 178-191.
- Keys, Barbara and Roland Burke (2013), "Human Rights," Richard H. Immerman and Peter Goedde, eds., *The Oxford Handbook of the Cold War*, Oxford University Press, pp. 486-502.
- Latham, Michael E. (2010), "The Cold War in the Third World, 1963-1975," Melvyn P. Lefler and Odd Arne Westad eds., *The Cambridge History of the Cold War*, Volume II Crises and Détente, Cambridge University Press, pp. 258-280.
- Lawrence, Mark Atwood (2013), "The Rise and Fall of Nonalignment," Robert J. McMahoned, *The Cold War in the Third World*, Oxford University Press, pp. 139-155.
- Little, Douglas (2010), "The Cold War in the Middle East: Suez Crisis to Camp David Accords," Melvyn P. Lefler and Odd Arne Westad eds., *The Cambridge History of the Cold War*, Volume II Crises and Détente, Cambridge University Press, pp. 305-326.
- Logevall, Fredrik (2010), "The Indochina War and the Cold War, 1945-1975," Melvyn P. Lefler and Odd Arne Westad eds., *The Cambridge History of the Cold War*, Volume II Crises and Détente, Cambridge University Press, pp. 281-304.
- Loth, Wilfried (2010), "The Cold War and the Social and Economic History of the Twentieth Century," Melvyn P. Lefler and Odd

(26) Arne Westad eds., *The Cambridge History of the Cold War*, Volume II Crises and Détente, Cambridge University Press, pp. 503-523.

Luthi, Lorenz M. (2014), "The Sino-Soviet Split and its Consequences," Artemy M. Kalinovsky and Craig Daigle eds., *The Routledge Handbook of the Cold War*, Routledge, pp. 74-88.

Mitter, Rana (2013), "China and the Cold War," Richard H. Immerman and Peter Goedde, eds., *The Oxford Handbook of the Cold War*, Oxford University Press, pp. 124-140.

Ovendale, Ritchie (1995), "Macmillan and the Wind of Change in Africa, 1957-1960," *The Historical Journal*, Vol. 38, pp. 455-477.

Plummer, Brenda Gayle (2013), "Race and the Cold War," Richard H. Immerman and Peter Goedde, eds., *The Oxford Handbook of the Cold War*, Oxford University Press, pp. 503-539.

Pechatnov, Vladimir O. (2010), "The Soviet Union and the World, 1944-1953," Melvyn P. Leffler and Odd Arne Westad eds., *The Cambridge History of the Cold War*, Volume I Origins, Cambridge University Press, pp. 90-111.

Perkins, Bradford (1986), "Unequal Partners" The Truman Administration and Great Power," Louis, WM. Roger and Hedley Bull, eds., *The Special Relationship: Anglo-American Relations since 1945*, Oxford University Press.

Radechenko, Sergey (2010), "The Sino-Soviet Split," Melvyn P. Leffler and Odd Arne Westad eds., *The Cambridge History of the Cold War*, Volume II Crises and Détente, Cambridge University Press, pp. 349-372.

Reynolds, David (1986), "The Roosevelt, Churchill, and the Wartime Anglo-American Alliance, 1939-1945: Toward a New Synthesis," WM. Roger Louis and Hedley Bull, eds., *The Special Relationship: Anglo-American Relations since 1945*, Oxford University Press, esp. pp. 17, 30.

Rotter, Andrew J. (2013), "South Asia," Richard H. Immerman and Peter Goedde, eds., *The Oxford Handbook of the Cold War*, Oxford University Press, pp. 211-229.

Saunders, Chris and Sue Onslow (2010), "The Cold War and Southern Africa, 1976-1990," Melvyn P. Leffler and Odd Arne Westad eds., *The Cambridge History of the Cold War*, Volume III Endings, Cambridge University Press, pp. 222-243.

Schmidt, Elizabeth (2013), "Africa," Richard H. Immerman and Peter Goedde, eds., *The Oxford Handbook of the Cold War*, Oxford

- University Press, 265-285.
- Schulzinger, Robert D. (2010), "Détente in the Nixon-Ford Years, 1969-18-976." Melvyn P. Leffler and Odd Arne Westad eds., *The Cambridge History of the Cold War*. Volume II Crises and Détente, Cambridge University Press, pp. 373-394.
- Simpson, Bradley R. (2013), "Southeast Asia in the Cold War," Robert J. McMahoned, *The Cold War in the Third World*, Oxford University Press, pp. 48-66.
- Stueck, William (2010), "The Korean War," Melvyn P. Leffler and Odd Arne Westad eds., *The Cambridge History of the Cold War*, Volume I Origins, Cambridge University Press, pp. 266-287.
- Yaqub, Salim (2013a), "The Cold War and the Middle East," Richard H. Immerman and Peter Goettle, eds., *The Oxford Handbook of the Cold War*. Oxford University Press, pp. 246-264.
- Yaqub, Salim (2013b), "The Cold War and the Middle East," Robert J. McMahoned, *The Cold War in the Third World*, Oxford University Press, pp. 11-26.
- Zhang, Shu Guang (2010), "The Sino-Soviet Alliance and the Cold War in Asia, 1954-1962," Melvyn P. Leffler and Odd Arne Westad eds., *The Cambridge History of the Cold War*. Volume I Origins, Cambridge University Press, pp. 353-375.
- 秋田茂 (二〇二二) 『イギリス帝国の歴史—アジアから考える』中公新書。
- 石井修 (二〇二五) 『覇権の驕り—米国のアジア政策とは何であったのか』柏書房。
- 大谷正 (二〇二四) 『日清戦争—近代日本初の対外戦争の実像』中公新書。
- 木畑洋一、南塚信吾、加納格 (二〇二二) 『帝国と帝国主義』有志舎。
- 木畑洋一 (一九九六) 『帝国のたそがれ—冷戦下のイギリスとアジア』東京大学出版会。
- 木畑洋一 (二〇一四) 『二〇世紀の歴史』岩波新書。
- 高坂正堯 (一九六六) 『国際政治—恐怖と希望』中公新書。
- 高坂生堯 (一九八九) 『現代の国際政治』講談社学術文庫。
- 佐々木雄太 (二〇〇六) 『世界戦争の時代とイギリス帝国』佐々木雄太編著『イギリス帝国と二〇世紀第三卷 世界戦争の時代とイギ

- リス帝国』ミネルヴァ書房、一―二四頁。
- 福井勝義、赤坂賢、大塚和夫 (二〇一〇) 『世界の歴史二四 アフリカの民族と社会』中公文庫。
- 松岡完 (二〇〇二) 『ベトナム戦争―誤算と誤解の戦場』中公新書。
- 松岡完 (二〇〇三) 『ベトナム症候群―超大国を苛む「勝利」への強迫観念』中公新書
- マツバニ、キョール (二〇一五) (山本文史訳) 『大収斂―膨張する中産階級が世界を変える』中央公論新社。
- 松下冽、藤田憲編著 (二〇一六) 『グローバル・サウスとは何か』ミネルヴァ書房。
- 水本義彦 (二〇〇九) 『同盟の相剋―戦後インドシナ紛争をめぐる英米関係』千倉書房。
- 宮城大蔵 (二〇〇二) 『バンドン会議と日本のアジア復帰―アメリカとアジアの狭間で』草思社。
- 武者小路公秀 (一九七七) 『国際政治を見る眼―冷戦から新しい国際秩序へ』岩波新書。
- 山影進編著 (二〇一三) 『主権国家体系の生成―「国際社会」認識の再検証』ミネルヴァ書房。
- 横手慎 (二〇〇五) 『日露戦争史―二〇世紀最初の大国間戦争』中公新書。
- 渡辺昭一編 (二〇〇六) 『帝国の終焉とアメリカ―アジア国際秩序の再編』山川出版会。
- 小川浩之 (二〇〇九) 『脱植民地化とイギリス対外政策―公式帝国・非公式帝国・コモンウェルス』北川勝彦『脱植民地化とイギリス帝国』北川勝彦編著『イギリス帝国と二〇世紀 第四卷 脱植民地化とイギリス帝国』ミネルヴァ書房、二五―六八頁。
- 宇佐美滋『指導力の回復を目指して』有賀貞、宮里政玄編『概説アメリカ外交史―対外意識と対外政策の変遷』有斐閣、一八一―二一〇。
- 川島真『社会主義とナショナリズム―一九二〇年代』和田春樹、後藤乾一、木畑洋一、山室信一、趙景達、中野聡、川島真『東アジア近現代史 上 一九世紀から現在まで』岩波書店、二〇一四年、一四三―一八三頁。
- 木畑洋一 (二〇一三) 『帝国と帝国主義』木畑洋一、南塚信吾、加納格『帝国と帝国主義』有志舎、一―五四頁。
- 桜井由躬雄 (一九九九)、『植民地化のベトナム』石井米雄、桜井由躬雄編『新版世界各国史五 東南アジアI 大陸部』山川出版会、三〇三―三四六頁。
- 佐々木卓也 (二〇一三) 『冷戦―アメリカの民主主義的生活様式を守る戦い』有斐閣。

- 篠崎正郎(二〇一一)「『引き留められた帝国』としての英国——コモンウェルスからの撤退政策、一九七四—七五年」『国際政治(特集…国際政治研究の先端八)』第一六四号、二九—四二頁。
- 砂野幸稔(一九九七)「パン・アフリカニズムとナショナリズム」宮本正興、松田泰二編『新書アフリカ史』講談社現代新書、四四五—四七〇頁。
- 高松基之(一九九八)「連戦の進展と変質」有賀貞、宮里政玄編『概説アメリカ外交史——対外意識と対外政策の変遷』有斐閣、一三七—一七九。
- 田中孝彦(一九九四)「パワー・ポリティクスの変容と冷戦——冷戦の終焉が意味するもの」鴨武彦編『講座制機関の世界政治 五 パワー・ポリティクスの変容——リアリズムとの葛藤』日本評論社、六九—一三三頁。
- 田中孝彦(一九九八)「冷戦構造の形成とパワーポリティクス——西ヨーロッパ vs. アメリカ」東京大学社会科学研究所編『二〇世紀システム 一 構想と形成』東京大学出版会、二二六—二五一頁。
- 長崎暢子(二〇一四)「ガンディー時代」辛島昇編『新版世界各国史七 東南アジアⅡ』山川出版会、三七二—四三三頁。
- 中野重里、遠藤聡、小高泰、玉置充子、増原綾子(二〇一六)『入門東南アジア現代政治「改訂版」』福村出版。
- 永野隆行(二〇〇二)「八書評論文」『イギリスと戦後東南アジア国際関係』『国際政治(特集…比較政治と国際政治の間)』第一二八号、二二—三三頁。
- 納家政嗣(二〇一七)「国際秩序と帝国の遺産」納家政嗣、永野隆行編『帝国の遺産と現代国際関係』勁草書房、一—二〇頁。
- 狭間直樹、長崎暢子(一九九九)『世界の歴史二七 自立へ向かうアジア』中央公論新社。
- ハリソン(竹村正子訳)(一九六七年)『東南アジア史』みすず書房。
- 半澤朝彦(二〇〇二)「国連とイギリス帝国の消滅——一九六〇—一九六三年」『国際政治(特集…冷戦の終焉と六〇年代性)』一二二—一四一頁。
- 半澤朝彦(二〇〇五)「中東におけるイギリス・アメリカの『非公式の帝国』の起源」『国際政治(特集…国際政治のなかの中東)』第一四一—一四五頁。
- 半澤朝彦(二〇〇七)「イギリス帝国の終焉と国連——イギリスの対国連政策(一九六〇—一九六二)」緒方貞子、半澤朝彦編著『グローバル・ガヴァナンスの歴史の変容——国連と国際政治史』ミネルヴァ書房、一八一—二〇二頁。

- 半澤朝彦（二〇一〇）「液状化する帝国史研究―非公式帝国論の射程」木畑洋一、後藤春美編『帝国の長い影』ミネルヴァ書房、三一―三四頁。
- 弘末雅士（一九九九）「近世国家の終焉と植民地支配の進行」池端雪浦編『新版世界各国史六 東南アジアⅡ 島嶼部』山川出版会、一八二―二六七頁。
- 藤原帰一（一九九二）「アジア冷戦の国際政治構造―中心・前哨・周辺」東京大学社会科学研究所『現代日本社会七 国際化』東京大学出版会、三二七―三六一頁。
- 藤原帰一（一九九八）「世界戦争と世界秩序―二〇世紀国際政治への接近」藤原帰一東京大学社会科学研究所編『二〇世紀システム 一 構想と形成』、二六―六〇頁。
- 細谷雄一（二〇〇六）「冷戦時代のイギリス帝国」佐々木雄太編著『イギリス帝国と二〇世紀第三卷 世界戦争の時代とイギリス帝国』ミネルヴァ書房、九五―二二八頁。
- ホワイトN・J（二〇〇六）（秋田茂訳）「帝国の残影―イギリスの影響力と東南アジアの脱植民地化」渡辺昭一編『帝国の終焉とアメリカ―アジア国際秩序の再編』山川出版会、一〇六―一三三頁。
- 前川一郎（二〇一三）「アフリカからの撤退―イギリス開発援助政策の顛末」『国際政治（特集：戦後イギリス外交の多元重層化）』第一七三号、一五―二七頁。
- 山室信一「新秩序の模索―一九三〇年代」和田春樹、後藤乾一、木畑洋一、山室信一、趙景達、中野聡、川島真『東アジア近現代史 上 一九世紀から現在まで』岩波書店、二〇一四年、一八五―二三三頁。
- 山本博之（二〇一八）「近代ナショナリズムの形成」古田元夫編『東南アジアの歴史』一般財団法人放送大学教育振興会、一〇八―一九頁。